

## 1 高貴な若者エル

- 丘の上に建つ城は  
城壁と塔に囲まれ 荘厳な構え  
そこに住むのは高貴な若者エル  
若く美しい騎士
- 高貴な若者エルは外へ出て 5  
薄暗い庭に立った  
その時 見よ 美しいエメリンの小姓が  
谷を駆け降りて来た
- 高貴な若者エルも谷へと急いだ  
じっと待つてはいられない 10  
ほどなく 丘を登って来た  
美しいエメリンの小姓に出会った
- 「小姓よ イエス様のご加護を  
イエス様がおまえをお救いくださるように  
聞かせておくれ 美しいエメリンがどうしたのか 15  
おまえの知らせは何なのか」
- 「エメリン様はお嘆きです  
涙に暮れておいでです  
お二人の家の恐ろしい<sup>いさか</sup>諍いを  
ずっと嘆いておいでです 20
- これはあなた様への絹のスカーフ  
涙でぐっしょり濡れています  
時々エメリン様を思い出して と仰せです  
これほど愛しておりますと
- これはあなた様への金の指輪 25  
おそらく最後の贈物  
エメリン様のために身に付けおいて と仰せです

たとえお墓に入られても

ああ エメリン様の優しいお心は乱れ  
お墓に入られるのも近いでしょう 30  
というのも 父上様が新しいお相手を選び  
あなた様を忘れよとのご命令

父上様が連れてきたのは卑しい騎士  
北国生まれのサー・ジョンと名乗るもの  
三日のうちに婚礼をあげよとのご命令 35  
従わぬなら殺すまで との仰せです」

「小姓よ 急ぎ戻ってくれ  
エメリンに伝えてくれ  
私こそ あなたの本当の恋人  
命を賭けてあなたを救いますと 40

小姓よ 急ぎ戻ってくれ  
エメリンに知らせてくれ  
今宵窓辺に参りますと  
この身に災いがあるとも」

小姓は軽やかに駆けてゆき 45  
止まりも休みもしなかった  
美しいエメリンの部屋へ戻ってくると  
膝をついて こう言った

「エメリン様 あなた様の本当の恋人に会いました  
エメリン様にこうお伝えせよ と仰せです 50  
今宵窓辺に参りますと  
命を賭けて エメリン様を救いますと」

昼が過ぎ 夜が来て  
人が皆 寝静まる頃  
エメリンだけが 55  
部屋に座って泣いていた

ほどなく 恋人の声が聞こえてきた

城壁の外で低くささやくような声  
「起きてくれ 起きてくれ 私の恋人  
呼んでいるのはこの私 あなたの本当の恋人だ」 60

起きてくれ 起きてくれ 私の恋人  
さあ この馬に乗ってくれ  
この縄梯子で部屋から出てくれ  
私があなただを連れてゆく」

「いいえ いいえ やさしい騎士様 65  
そんなことはできません  
ひとりであなたについてゆくなら  
乙女の名譽を汚すことになりましょう」

「恋人よ 愛する私がお供するのだ 70  
安心してくれ  
私の母上の元へゆき  
結婚式を挙げるのだ」

「父は勇敢な男爵 75  
譽れ高く 高貴な血筋  
娘が騎士と逃げたとわかったら  
何を言うかわかりません

ああ わかっているの 父は眠れず  
食事も喉を通らない  
高貴な若者エルを殺すまで  
あなたの心臓から流れる血を見届けるまで」 80

「恋人よ 馬に乗ってくれ  
お父上から少しだけ離れてくれれば  
残酷なお父上などものともすまい  
どんな仕打ちも受けて立とう

恋人よ 馬に乗ってくれ 85  
一旦 城壁の外へ出てくれれば  
残酷なお父上などものともすまい  
どんな仕打ちも受けて立とう」

美しいエメリンはため息ついて泣くばかり  
エメリンの心は嘆きの渦 90  
ついに エルはエメリンの百合色の手を取って  
縄梯子を引き落とした

三度エメリンを胸に抱き  
そっと彼女に口づけした  
エメリンの目から涙が 95  
泉のように溢れ出た

高貴な若者エルは背の高い馬に乗り  
エメリンは美しい馬に乗り  
高貴な若者エルは首に角笛を下げ  
威勢良く 二頭は駆け去った 100

エメリンの侍女が話をすっかり聞いていた  
ベッドに寝ていて聞いたのだ  
「男爵様にお知らせ  
ご褒美に金貨をいただきよう」

起きてください 起きてください 勇敢な男爵様 105  
起きてください 気高い奥様  
お嬢様が高貴な若者エルと駆け落ちなどと  
破廉恥なことをなさいました」

男爵は起き上がり  
家来皆を呼び集めた 110  
「騎士サー・ジョン 前へ出よ  
いいはずけ はか  
許嫁が謀られた」

美しいエメリンが一マイルも行かぬうち  
町から一マイルも離れぬうちに  
父親の家来たちが 115  
丘の上を全速力で駆けてくるのに気が付いた

最前列で駆けてくるのは あの卑しい騎士  
北国生まれのサー・ジョン

「生まれ 生まれ 邪悪な盗人<sup>ぬすっと</sup>  
姫様を奪うなどもってのほか

120

姫様の出は高貴な血筋  
生まれながらの貴婦人だ  
邪悪な百姓の倅<sup>せがれ</sup>め 分をわきまえよ  
姫様を奪うなど言語道断」

「大嘘つきの騎士サー・ジョン  
よくも私を侮<sup>あなど</sup>ったな  
父は騎士 母は貴婦人  
おまえとは赤の他人

125

恋人よ 馬から降りて  
私の馬の手綱をしっかりと持ってくれ  
この無礼な騎士と  
激しい一騎打ちをする間

130

恋人よ 馬から降りて  
私の馬の手綱をしっかりと持ってくれ  
この無礼な騎士と  
命をかけた一騎打ちをする間

135

美しいエメリンはため息ついて泣くばかり  
エメリンの心は嘆きの渦  
恋人と卑しい騎士は  
勇ましく打ち合った

140

高貴な若者エルの腕前<sup>まさ</sup>勝り  
太刀を振るって闘った  
ほどなく 卑しい騎士を一撃  
やつを大地に打ち倒した

男爵と家来たちが  
全速力で追いついた  
ああ エメリンはどうすればいいのか  
もはや逃げることもままならない

145

エメリンの恋人は角笛を口にあて  
大きく鋭く吹きならした 150  
ほどなく エルの家来たちが  
丘を越えて駆けてきた

「太刀をお収めください  
勇敢な男爵様  
無慈悲にも私たちの心を引き裂くことはお止めください 155  
まこと 真の愛の絆でしっかりと結ばれているのです

お嬢様を心から愛しているのです  
長い年月変わらずに  
聖なる教会にも認めてもらえる  
清らかな愛を育んできたのです 160

ふたりの結婚をお認めください  
信頼し合うふたりに祝福をお与えください  
領地と財産は決して少なくありません  
家系も血筋もりっぱです

母は伯爵の娘 165  
父は高貴な騎士でした」  
男爵は顔を曇らせ背を向けた  
怒りと悲しみで胸は一杯

美しいエメリンはため息ついて泣くばかり  
身を震わせて立っていた 170  
ついに エメリンは膝をついて 手を伸ばし  
振り上げられた父の手をとった

「お許してください 愛しいお父様  
この美しく若い騎士とのことを  
誓って あの卑しい騎士さえいなかったら 175  
駆け落ちするはずはありません

わしのエメリンと そう呼んでくださいました  
わしの愛しき喜びと  
だから 手荒なことはお止めください

エメリンの命を奪わないでください」 180

男爵は日焼けした頬を撫で  
顔を背け  
溢れ出る涙を  
誇り高くも隠そうとした

立ち尽くして 思いを巡らせ 185  
しばらく考え込んでいたが  
美しいエメリンを立ち上がらせて  
しっかりと胸にかき抱いた

「高貴な若者エルよ 娘を連れてゆくがいい」  
男爵はエメリンの百合色の手をエルに渡した 190  
「わしの最愛の一人娘をくれてやろう  
わしの領地の半分が持参金

おまえの父はその昔 わしの名誉を汚したが  
それは若気の至りのこと  
親の罪滅ぼしは 195  
娘を妻として愛することだ

娘を愛し 優しくすれば  
天もおまえたちを祝福しよう  
わしの祝福をおまえに与えよう  
愛しい娘 エメリンに」 200

(中島久代訳)